

## 自主シンポジウム 6

## 教育心理学からみた「新しい学力観」

企画者：無藤 隆（お茶の水女子大学）

司会者：市川伸一（東京大学／東京工業大学）

話題提供者：奈須正裕（神奈川大学）

馬場久志（帝京大学）

秋田喜代美（立教大学）

鹿毛雅治（慶応義塾大学）

指定討論者：無藤 隆（お茶の水女子大学）

北尾倫彦（京都女子大学）

企画主旨

学校教育の実践において「新しい学力観」ということが問題とされ、指導のあり方が問われている。また、「学力観」の変化に伴って指導要録の改訂が行われ、評価のあり方も模索されている。本学会でも昨年度（1993）、「新しい学力観」というテーマで「ディスカッション・アワー」が行われ盛況であった。この「新しい学力観」をめぐる指導と評価のあり方については教育心理学の観点からこそ特に検討する価値があるのではないかと考えられる。

そこで、本シンポジウムでは「新しい学力観」をめぐる問題をテーマとして取り上げ、具体的な教育心理学の知見と教育実践との関わりについて提案する。すなわち、まず、「新しい学力観」に関わる教育実践の現状について紹介（奈須）した上で、「新しい学力観」の理念と教育心理学の知見の関連（馬場）、指導の問題（秋田）、評価の問題（鹿毛）について、それぞれ話題を提供する。それらの提案を通して、教育心理学の研究者が教育実践について、どうとらえ、どう関わっていったらよいのかについても、認識を深めていきたい。

“新しさ”とは何か：現場の“対応”をめぐる

奈須正裕

今、全国の学校教育はとにかく混乱している。しかもこの度の混乱は、これまで現場が経験してきた混乱、例えば教師の勤務評定をめぐる組合がらみの混乱や、廊下をバイクが走り教師がぶん殴られた校内暴力の混乱とは質が違ふ。“新しい”学力観にかかわる“新しい”種類の混乱である。学力観、子ども観、知識観、授業観、そして教師観を180度転回せよと文部省が本気で言い出した。知識から情意へ、画一から個性へ、座学から活動へ、書物から体験へ、学問から生活へ、客観性から多面性へ、教授から支援へ。明治以来の伝統を誇るスズメの学校をことごとく解体し、メダカの学校として再生させようというのである。

〇〇観だけなら、態度の問題にすり替えてホンネと

建て前を使い分け逃れることもできるが、〇〇観といっしょにそれを実現に移す様々な道具立てが、制度改革や予算編成を伴って、毎年雨のように降ってくる。生活科や情報基礎の新設、指導要録の改訂、多目的スペースへの助成金、ティーム・ティーチングを前提とした教員の加配、さらにこれらを推進するための研究指定。これでは逃げようがない。現場はついに覚悟を決めて、本気でこれに“対応”しようとしている。

新しい学力観やそれに伴う制度改革は、まぎれもなく子どもの学びの論理に寄り添った教育の実現の方向を向いている。ようやく子どもを中心に据えた本来の学校づくりができるのだ。にもかかわらず、多くの現場は混乱し、躊躇している。概して現場の空気は重く、校長に任命された若い研究主任はまるで犠牲者である。なぜだろう。そして、どうすればいいのだろうか。また、研究者は何をすべきなのだろう。「やってきてしまったもの」に“対応”するのではない、自分たちの主体性に基づいた学校改革の基盤について、いくつかの学校改革の事例をもとに、第2者の見地で考えてみたい。

「新しい学力観の理念」と教育心理学の課題

馬場久志

「知識偏重から思考力・主体的対応力へ」「関心・意欲・態度の重視」「個性の尊重」という「新しい学力観」の主な特徴に対して、学校の内外では期待と危機とが生まれている。たとえば危機は、情意領域を孤立に扱うことに無理がありまた認知領域は軽視されるため結局両者とも見失ってしまうということや、個々の未熟な状態に合わせて目標を引き下げしてしまうことなど、指導の実際に関する批判を始め、学力保障の放棄であるとか適応主義であるという公教育の根幹に関わる議論に及ぶ。他方、期待は心理学界にもあると見られるもので、認知、動機づけ、教育評価などいくつかの研究領域で近年重視されてきたことが取り入れられたように思えるものである。あえて言えば、技術の学として専ら用いられてきた教育心理学が、何を学ぶのかという問題にも関わりをもたされたということになる。そういう状況で、上記の危機も含め「何を学ぶ

のか」「学ぶとはどういうことか」ということを教育心理学の問題として論じることが求められている。検討課題は多いが、ここではいくつかの点について考えたい。

①知識とは何か。知識のあり方を中心に展開されてきた近年の認知研究との関わりでは、知識の偏重とはどういうことか。また思考力とか主体的に対応する力とは何か。

②あらためて集団の学習をどうとらえるか。個の問題として学習をとらえてきた心理学には、集団学習を「集団が学習する」としてはとらえ得ないのか。

その他、認知と情動の関係、学力における基礎・基本、個性のとらえ方など、多くの課題があろう。

これらと合わせて、教育の理念や実践を表現するときの用語と心理学概念とのずれが、教育を対象とする心理学研究の知見を伝えにくくしている問題にも留意したい。

#### 「新しい学力観」を支える教師の思考と行動

秋田喜代美

「子ども一人一人のよさが生きる」授業は「教師一人一人のよさが生きる」授業でもあるべきだと筆者は考えている。「子ども一人一人のよさをいかす」新しい学力観を支えるのは教師一人一人の授業観とそれに基づく授業のあり方、またその教師達をサポートする学校や社会環境のあり方である。「新しい学力観」への改訂が制度的形式的に行われても、教師の授業に対する考え方や行動が現実に変わらなければ教室は変わっていかないだろう。ではどのような認識や思考の転換が必要なのだろうか。知識・技能伝達型の先生といわゆる新しい学力観をいかす共同作成型の先生では、授業観や思考過程で何が異なるのだろうか。

筆者は、授業観と授業中の思考過程の点から教えることの熟達化に関する研究を行ってきた。今回はこの具体的な結果をふまえながら、新しい学力観を実現するためにはどのような認識の変容が必要と考えられるかを5つの点から示してみたい。①授業中における教師の思考（計画実行型の思考から文脈、状況に支えられた思考へ）、②教師役割の認識（伝達者としての教師から支え、学び合う教師へ）、③「教材」に対する認識と教材解釈のあり方（教科書単元主義の教材観から生活の中での文化的道具としての教材観へ、自分の学級の子どもの理解を想定しての教材解釈と学問世界の中に教材を位置づけることのできる教材解釈へ）、④「教室空間」「授業時間」の認識（分断され閉鎖された空間から開かれた学びの場へ）、⑤授業後における授業評価のあり方（スポット的評価からストーリーとしての授業評価へ）の5点である。これらの提案を

通して教育心理学者としての私自身がどのように授業研究に関わることができるのかを考えてみたいと思う。

#### 「新しい学力観」と教育評価

鹿毛雅治

「新しい学力観」に立つ教育の実現は評価の改善と表裏一体を成すものであると一般に理解されている。「関心・意欲・態度」を「知識・理解」よりも重要視することを評価実践のレベルで具現化した「新指導要録」が何よりもそのことをよく物語っている。要録の改訂に伴って、全国の学校の「通信簿」の改訂も進み、見事なほど「新しい学力観」に基づく「評価観」がそこに具体化されつつある。このような状況の中で、われわれ教育心理学者には、「新しい学力観」それ自体を問う暇を通して、子どものよりよい成長や発達を保障するような教育実践を創造するための確かな視点を提供することが望まれている。

ここで問題にしたいことは以下の2点である。第1に、「新しい学力観」に立つ学力で重要視される「自ら学ぶ意欲」なるものについて批判的に吟味してみたい。もとより教育心理学には「内発的動機づけ」という概念が存在し、教育においてそれが尊重されるべきであることは再三主張されてきた。「新しい学力観」における「主体的」な意欲と「内発的動機づけ」とは一体どこが同じでどこが異なるのであろうか。比較検討してみたい。また、評価との関連でいえば、「新しい学力観」において「関心・意欲・態度」が「知識・理解」よりも重要視され、学力の中核として位置づけられているが、そこで評価される「知識・理解」と切り離された「関心・意欲・態度」とは何なのか、また、その能力を評価することの意味についても考えてみたい。

第2に、よりよい教育評価の実践を創造する視点を提供するために、筆者自身の研究を紹介することを通して、「成功・失敗」を示す評価から、学習を深化させるのに有効な「情報」を提供する評価へと教育実践を転換させることの重要性について指摘したい。子どもの学習意欲を育てるためには、学習に関する測定をし、子どもにその結果を能力のレッテルとして授けるというような「選抜的測定」から、学習に関する情報を子どもに提供するとともに、その評価の結果を教師自身が実践を改善する資料として用いるというような「教育的評価」へと「評価観」を転換させることが不可欠であろう。この転換は正に「教育評価」の本質を実現することに他ならないと筆者は考える。